

活字離れという禍^{わざわい}

プレストン・L・ハウザー

20世紀初頭にあつては、先進社会の繁栄のためには、知的な若者が毎世代輩出されることが必須である、という考えが広く共有されていた。公的な教育機関で働く教員たちは、文化を管理・世話する任を負っていた。彼らは学生たちに学問的な、または上位文化の規範を維持・伝達する役割を担っていたのである。しかしながら、20世紀後半には、企業の利益（を優先する姿勢）にあおられて教育の世界に電子機器が出現することになる。そして、以下の変化がもたらされた——今日の若者は最低限以上の読み書きをもはや機能的に行っていない。若者たちは、無情な企業エリートと彼らが一般大衆に提供する装置^{ガジェット}に翻弄されている——この状況は、企業にとっては利潤を追求する心的態度を、若者にとっては貧しさを意味するのだが。本稿で扱う問題は多岐にわたる。「活字離れの禍」、客体の主体に対する優位性、企業側の非、言説の信頼性、欺瞞、匿名のアイデンティティ、最後に、こうしたテクノロジーの新機軸が社会全体に、とりわけ教育界にもたらした、そして今後もたらし続けるであろう波及効果の否定的な側面を紹介したい。

第二次世界大戦は人間の意識上の特別な変化によって特徴づけられていた——客体（モノ）が主体（人間）の優勢に立ったのである。大戦に勝利したのは、本質的には人間ならぬ機械だったのであり、以降、非-人間が恐れられる敵となった（まずは「爆弾」、次いでコンピューター、原子力、薬物、自動車が人間以上に人間を殺めることになるといった具合に）。人間性の主観的特質（共感性）は、テクノロジーの客観的出現の増加（ガジェット）によって挑戦を受けた結果、弱体化し、今や瀕死の状態にある。今日の若者の注意持続の範囲は減少する一方であり、広告とエンターテインメントが、文学と科学に拮抗するという有様である。現在では、家族、友人、共同体への関与を犠牲にして電子機器に暗黙の忠誠を誓う人々はますます増加している。人文文化のこの退廃は、今どきの大学生の資質の変化に顕著に表れている——彼らは、読み書き、複雑な思想を理解すること、倫理的価値観を協議すること、現行のとは異なる振舞いを想像すること、批判的に思考することに困難を覚えている。たとえば、若者は TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）という頭

字語を情報として認識することはあっても、この概念が意味するところ、ましてやその批准が世界の国々にとってどういったことを含意するのかについてはわかっていない。企業のメディア重視の姿勢は、情報が知識と同義であることを意味し、若者からは社会参加のチャンスを奪い、彼らの市民感覚をなきものにしてきたと私は考える。

人間主義的文化とは相容れない企業文化は、機械を人智より重んじるため、リテラシー（読み書き能力）が時代遅れとなり、経済的適者生存への障害となるという状況が生じてきた。21世紀の現在においても、知的な若者を送り出すことが社会の存続にとって絶対に必要である以上、この活字離れの——読み書きならぬ、スクリーン上で見ることと投射することの——「禍」は、高等教育機関と社会全体が直面しているまぎれもない課題なのである。